

科目名	メディア論		
授業形態	講義	学年	2
開講時期	2022年度 後期	単位数	2
担当教員	御手洗 陽		
内容および計画	ふだんは使わない感覚を使い、柔軟な発想を生み出し、自らの創造性を高めるために、さまざまなメディア利用の取り組みにふれる。歴史を手がかりに現在とは異なる利用の形態を学び、アートやデザインにおける実験的な利用を視野に入れ、創造的な利用を探るための実習的な課題も適宜組合せながら講義を進める予定。		
1	イントロダクション		
2	メディア論の視点		
3	映像の再発見:視覚玩具、写真、映画		
4	映像の生成と変容:映画の初期利用		
5	映像の実験的利用:アートやデザインの取り組みから		
6	メディア利用の探究:課題「映画の観察」		
7	音響の再発見:サウンドスケープの発想		
8	音響の生成と変容:ポータブル・オーディオの初期利用		
9	音響の実験的利用:アートやデザインの取り組みから		
10	メディア利用の探究:課題「音響の記述」		
11	文字・活字の再発見:黙読・線と模様・電子テキスト		
12	文字・活字の生成と変容:書物・本棚の初期利用		
13	文字・活字の実験的利用:アートやデザインの取り組みから		
14	メディア利用の探究:課題「文字の生成」		
15	まとめ		
教科書			
	タイトル	著者名	出版社
			ISBN
			発行年
教科書は特に使用しない。必要に応じて印刷物を配布する。			
参考書	1)マクラーハン+フィオーレ『メディアはマッサージである：影響の目録』河出書房新社、2015年。2)エルキ・フータモ『メディア考古学』NTT出版、2015年。3)馬定延『日本メディアアート史』アルテスパブリッシング、2015年。4)R.マリー・シェーファー『世界の調律』平凡社、2006年。		
成績評価			
	評価方法	割合(%)	
	講義時間内に提出・報告するレポート課題	70	
	講義時間外に作成するレポート課題	30	
学習到達目標	メディア論の視点から集合的な利用の生成と変容を視野に入れ、身近にある使い慣れたメディアを改めて再発見できるようになる。また映像、音響、文字・活字などのメディア利用をめぐるアートやデザインの取り		

	組みを知り、創造性を見てとるリテラシー、いわば眼や耳の使い方を身につける。
<b>先修条件</b>	
<b>実務経験</b>	実務経験あり：企業や行政のために企画・調査を行うシンクタンクの客員研究員を経験。実際に自分の身体（眼や耳）で観察すること、その成果をことばにすることの重要性を実感した。この経験をもとに観察を重視したメディア利用の課題を設計し、受講者と取り組んでいる。
<b>その他</b>	受講者数にもよるが、創造的なメディア利用を探るために、実習的な課題にも取り組む予定。（ただしデッサンや特殊機器の操作能力等、特別な技能は必要とされない）。また課題の内容にしたがい講義時間外にもレポート作成や報告準備等に取り組む必要がある。なお多くの回をオンライン(リアルタイム配信)で実施する予定。